

日本英文学会北海道支部

第59回大会プログラム

日時：平成26年10月25日(土)

会場：北海道武蔵女子短期大学

(札幌市北区北22条西13丁目)

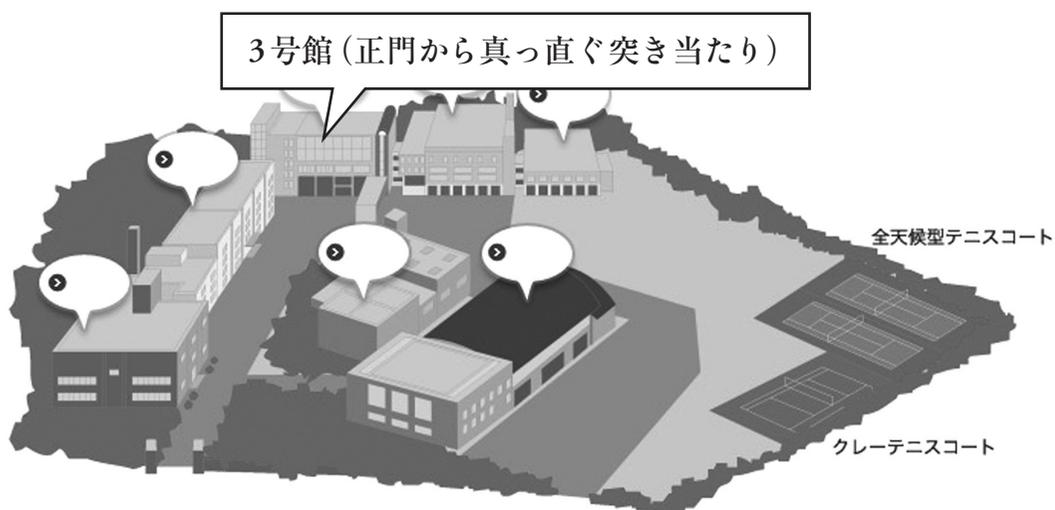
<会場アクセス>

- ・地下鉄南北線「北24条」駅から
 - 中央バス北桑園線(西51番)「南新川」下車 徒歩1分
 - 中央バス新川線(北72番)「北24条西13丁目」下車 徒歩5分
 - JRバス北24条線(軒32番)「北24条西13丁目」下車 徒歩5分
 - ・JR「桑園」駅から
 - 中央バス北桑園線(西51番)「北22条西15丁目」下車 徒歩2分
 - ・JR「札幌駅南口(旧札幌西武前)」から
 - 中央バス北桑園線(西51番)「北22条西15丁目」下車 徒歩2分
 - ・JR「八軒」駅から 徒歩15分
- ※札幌周辺の公共交通案内：さっぽろえきバス navi (<http://ekibus.city.sapporo.jp/>)

<地図>



※「マクドナルドの向かい」及び「スーパーダイイチの向かい」にコンビニがあります。



【参加者にご留意頂きたい点】

*大会当日、大学食堂・生協は開店していません。大変申し訳ありませんが各自でご用意頂けましたら有難く存じます。なお、大学付近にコンビニとマクドナルドがございます。

*会場校の建物内は土足厳禁となります。スリッパは会場校で用意されますが、参加者が個人でご用意いただいても構いません。

【懇親会のご案内】

日 時：10月25日(土) 18:00～20:00

場 所：3号館 5階 食堂

参加費：一般5000円、学生2500円

*懇親会参加希望の方は、9月1日(月)から10月11日(土)の間に、下記担当までにご連絡頂けますようお願い申し上げます。

事務局 西 真木子 Eメール：hokkaido(at)elsj.org

(件名に「懇親会参加希望」とお書き下さい。また、(at)は@に置き換えて下さい)

多くの皆さまのご参加申し込みをお待ちしております。

*書籍展示 (3号館3階ロビー)

*発表者・参加者控室 (3号館3階339教室) お茶とお菓子の用意があります。

10月25日(土)

受付開始 (10:00～) (3号館3階ロビー)

理事会 (9:30～) (3号館3階330教室)

開会式 (10:30～) (3号館3階333教室)

開会の辞 日本英文学会北海道支部支部長 高橋英光

〈文学部門〉(3号館3階333教室)

研究発表 (10:40～12:25)

- | | | | |
|-------------|--|-----------------|---------|
| | 司会 | 北海道武蔵女子短期大学 | 沢 辺 裕 子 |
| 1. (10:40～) | ルイス・キャロルとティム・バートンの <i>Alice in Wonderland</i>
におけるジェンダー・ロール | | |
| | | 北海道大学大学院 | 白 馬 沙 知 |
| 2. (11:15～) | C. S. ルイスとクリスチャン・ポストモダニズム：悪魔のカニバリズム | | |
| | | 藤女子大学非常勤講師 | 湯 浅 恭 子 |
| | 司会 | 札幌大学 | 佐 藤 美 希 |
| 3. (11:50～) | Wildeと消費主義 | | |
| | | 北海道教育大学旭川校非常勤講師 | 本 間 里 美 |

シンポジウム (13:30～16:00)

文学史を書くこと、文学史を教えること

- | | | |
|----------|--------|---------|
| 司会： | 法政大学 | 丹 治 愛 |
| 講師： | 立教大学 | 後 藤 和 彦 |
| 講師： | 東京女子大学 | 原 田 範 行 |
| 講師： | 東京大学 | 高 橋 和 久 |
| コメンテーター： | 東京大学 | 阿 部 公 彦 |

研究発表 (16:15～17:25)

- | | | | |
|-------------|---|----------|---------|
| | 司会 | 北星学園大学 | 伊 藤 章 |
| 1. (16:15～) | “Homeへの終わりなき旅——Emily Dickinsonの家と移動にみる死生観 | | |
| | | 北海道大学大学院 | 石 川 まりあ |
| 2. (16:50～) | 死者を欲することなかれ：
F. Scott Fitzgerald “Babylon Revisited”における死者との対話 | | |
| | | 北海道大学大学院 | 松 浦 和 宏 |

〈語学部門〉(3号館3階332教室)

研究発表 (13:30～14:05)

司会 札幌大学 對馬 康 博
無生物主語構文に関する分析
北海道大学大学院 山 岸 麻 衣

招聘発表 (14:05～14:50)

司会 札幌大学 濱 田 英 人
日本語の知覚体験による事態把握における表現の特徴について
一言語表現と映画ポスターの関連にもふれて—
北海道武蔵女子短期大学 尾 野 治 彦

セミナー (15:00～16:20)

司会 北海道大学 奥 聡
生物言語学としての第二言語獲得研究と英語教育
宮城学院女子大学 遊 佐 典 昭

特別講演 (16:30～17:45)

司会 北海道大学 高 橋 英 光
日英語の語彙概念拡張に関する一考察
大阪大学 岡 田 禎 之

懇親会 (18:00～20:00)

場所：3号館 5階 食堂

〈発表要旨〉

〈10月25日(土)〉

〈文学部門：研究発表〉

ルイス・キャロルとティム・バートンの *Alice in Wonderland* におけるジェンダー・ロール

白馬 沙知 (北海道大学大学院)

この発表では、19世紀の文学作家ルイス・キャロル著の *Alice's Adventures in Wonderland* (以降『キャロル版』と表記する、1865) と、現代の映画監督ティム・バートンによる映画作品 *Alice in Wonderland* (以降『バートン版』と表記する、2010) におけるジェンダー・ロール (性別役割) を、各作品を対象とした研究者・専門家の批評を取り上げながら論じる。キャロル版とバートン版におけるジェンダー・ロールの変容は、女性が家庭や結婚を中心とする価値観にとらわれた非力な存在であった19世紀と、女性が従来の価値観にとらわれず、より自由で独立した存在になった現代の社会における、人々の価値観の差異から生じたものだと考えられる。キャロル版が、困難に立ち向かう幼いアリスを描くことで、女性の解放と理想を訴えるものであり、バートン版がそれらを達成したアリスを、自由で多様な選択肢を持てる現代社会の女性の映し鏡として描いているということを、この発表で示したいと思う。

C. S. ルイスとクリスチャン・ポストモダニズム：悪魔のカニバリズム

湯浅 恭子 (藤女子大学非常勤講師)

C. S. ルイスの小説『悪魔の手紙 (*The Screwtape Letters*)』(1942) は、悪魔のスクリューテープから甥のワームウッドに宛てた手紙である。これまでは「患者」(人間) を中心に読まれてきたが、Will Vausや Devin Brown は、悪魔から神へと視点を逆転させるルイスのレトリックに着目した。本発表では、この視点の逆転が、悪魔・神の間だけでなく、手紙の書き手と読み手の二人の悪魔の間に起きたカニバリズムの物語として読むことによって、ルイスがクリスチャン・ポストモダニズムの作家であることを明らかにする。クリスチャン・ポストモダニズムは、大きな物語を脱構築するポストモダニズムとは異なり、ルイス作品のワードとイメージの衝突と調和が、多様な物語を受容はするが最終的には人間的理解を超える大きな物語を志向する文学を指す。本発表の「カニバリズム」は、神から切り離された悪魔が悪魔を共食いすることによって永遠の飢えの中を生きる地獄を意味する。

Wilde と消費主義

本間 里美 (北海道教育大学旭川校非常勤講師)

De Profundis で Wilde (1854-1900) は、過酷な獄中生活を通して、物欲を排した“Humility”への到達に成功したと述べた。その一方でWildeは、出獄後に再び恋人Bosieと暮らすための金も必要としていた。この相反する思考について、消費主義の観点から論じる。

Wildeは *De Profundis* において、過去のBosieとの関係や放蕩を回顧し、苦難を“Humility”に昇華させた。この書簡の特殊性は、それがWildeの作品で唯一読者を想定しなかった点にあり、それ

故に過度に自身を飾る必要性がなかったからこそ、Wildeは“Humility”へと達することができた可能性がある。

しかしながら、*De Profundis*は出版の意図を持って執筆されたとの指摘もある。Wildeは、友人Rossに宛てた書簡の中で、*De Profundis*のコピーの作成方法について、他の出版された作品と同様の指示を出していたのである。出版の目的は、出獄後に、浪費家であるBosieと暮らす金を稼ぐことであったと推察される。

消費主義に焦点をあてることによって、*De Profundis*における、Wildeの聖と俗の思考の間での揺らぎについて考察する。

“Home”への終わりなき旅——Emily Dickinsonの家と移動にみる死生観

石川 まりあ（北海道大学大学院）

Emily Dickinsonの「家」と「移動」のイメージは、詩人独自の死生観を読み取るうえで重要である。Dickinsonが死後世界(Heaven, Paradise)を描く際に多用する家のモチーフは、従来、天国を人生の旅路の最終目的地とするキリスト教的な死生観の表れと解釈されることが多かった。しかし、多くのDickinson作品において、「家」への旅は出立や道中の描写にとどまり、最終目的地であるはずの「家」(天国)には「辿り着けない場所」の感覚がつかまとう。一時的な仮宿、「テント」にも譬えられる天国の不確実性からは、目的地それ自体が移動してしまうことすら示唆され、動くゴールを追って彷徨う「終わらぬ旅」が構想されているように思われる。本発表では、家への旅路のイメージに着目し、当時の社会文化的背景にも目を配りつつ、移動のモチーフからDickinsonの「家」表象を検討する。不動よりも動性を、到達よりも継続を志向するDickinsonの死生観を提示するとともに、その文学史上の意義を考察したい。

死者を欲することなかれ：F. Scott Fitzgerald “Babylon Revisited”における死者との対話

松浦 和宏（北海道大学大学院）

F. Scott Fitzgeraldの“Babylon Revisited”(1931)は、死者と主人公Charlie Walesの間に横たわるジレンマを描いた物語である。この視座は、Charlieが抱える原的な問題-死者との間に繋留された負債の返済不可能性-として物語中に立ち現れる。彼から亡くなった妻へ捧げられる「贖い」の行為は、引き離された娘を取り戻し、「現在」を手に入れると同時に、過去の虜囚となっている我が身を解放するための触媒となるはずであった。しかしながら、喪失した「現在」とCharlieを架橋する娘の存在は、皮肉にも、埋葬すべき「過去」をも招喚してしまう存在として機能する。ここに、Charlieが潜在的に抱えるジレンマが顕現化することになる。本発表は、Charlieと死者の関係性に照準を合わせ、1930年前後のFitzgeraldが死者といかにして向き合っていたのかを作品分析と伝記的事実を通して考察する。そして、作者と死者の間に漂う「葛藤」が基礎的なダイナミズムとして物語を駆動しているということを説き明かしたい。

〈文学部門：シンポジウム〉

文学史を書くこと、文学史を教えること

司会： 丹 治 愛（法政大学）
 講師： 後 藤 和 彦（立教大学）
 講師： 原 田 範 行（東京女子大学）
 講師： 高 橋 和 久（東京大学）
 コメンテーター：阿 部 公 彦（東京大学）

複数の執筆者による文学史しかありえなくなっている感のあるイギリス文学を専門とする者からすれば羨ましい事態であるが（この差はなぜだろう）、一個人による文学史が書かれつづけているアメリカ文学者のあいだでは、現在、文学史をめぐる活発な議論が起きているように見える。その議論は、結局は現在の文学研究の大きな問題——文化、歴史、物語、国民国家、ナショナリズムなど——と関わっているだろう。そしてそれは、たとえ文学史を書くことはなくても、文学史を教えている者にとっても切実な問題だろう。

本シンポジウムは、文学史を教えることによってそれを書くことを強いられている英米文学研究者として、文学史と文学研究の現在の問題をあらためて議論する場であるとともに、英米文学教育者として文学史を教えるときになにを重視しているか、どのような工夫を凝らしているかといった実際的なヒントを披露しあう場ともなるだろう。

（文責・司会：丹治愛）

「歴史と文学のあいだには」、再び

後藤 和彦（立教大学）

平石貴樹の「歴史と文学のあいだには——日本におけるアメリカ文学史」（2005年）、これに対し「どこかに、『日本イデオロギー』としての『文学主義』を反復しようとする習性を残している」と批判したのが、みづから「歴史派」を名乗る村山淳彦の「アメリカのアカデミズムと日本のアメリカ文学研究」（2007年）。いずれの論考も北海道産手練れのアメリカ文学者の手になるもの、息を呑む応酬は本来傍観者たるに如くはないが、両論に共有される「戦後日本」を同じく史的射程とし、アメリカ文学史の（不）可能性をめぐる両者の争点を参照枠に用い私にも思い当たるところを述べてみたい——文学史にその「端的な修羅場」を見出すであろう歴史と文学のあいだには、男と女のあいだにある、とかつて流行歌の歌詞にいった、「誰にもわたれぬ」「深くて暗い川がある」のか、それとも「なれど、えんやこら今夜も舟を出す」の心意気だけがまた新しい文学史への原動力となるのか、などと。

英文学史的に考える近代小説の展開と韻文の推移

原田 範行（東京女子大学）

「英文学史」は、その概念においても教育的実践においても、三つの大きな軛を免れえないように思われる。「英」とは、イギリスのことなのか、英語圏のことなのか、スコットランドやアイルランド

は含むのか、含まないのか、という問題が一つ。「文学」(literature)とは今日的な意味でのことなのか、それとも、文芸や学芸全般、ジャーナリズムなどを含む18世紀以前の包括的な内容としてのものなのか、ということが二つめ。そして三つめには、英文学の系譜を「史」的に追うことと英文学的因果関係の系譜とは、どこまで重なるのか、重ならないのか、現代から遡行して考えるのは有益なのか、混乱を招くだけなのか、という問題。今回のシンポジウムでは、こうした問題意識を基礎に置きつつ、しかしその多様な広がりをも有効に活用するための切り口と、「英文学史」の授業における実践例を、概ね17世紀後半から19世紀前半にかけての近代小説の展開と韻文の推移に対象を絞って検討したい。

英文学史の「臭み」

高橋 和久 (東京大学)

今回お話できることは、すでにこれまでどこかで書き、口にもしたことの二番煎じになってしまうのではないかと恐れますが、ともかくわたしは〈英(イギリス)文学史〉の授業、もしかするとそのディシプリンそのものが苦手です。この苦手は、例えば、鮎ネタのエビが苦手、の苦手に似ています。授業で知ったかぶりをしなくてはならないという大前提(これはアメリカ文学よりも大きいかもしれませんが)にいまさら感じる良心の痛みには黴が生えていて誰も食べないとすれば、それ以外の苦手の理由は別として〈英〉が孕む曖昧な甘さと〈史〉の醸し出す臭みに由来すると勝手に考えています。「勝手に」と留保をつけるのは、エビの好きな人も沢山いるからです。)他のスピーカーの方のお話を伺ってからお話するというこのようですので、一種類ではないかもしれない「臭み」についての愚痴が主になるのではないかと思います。

〈語学部門：研究発表〉

無生物主語構文に関する分析

山岸 麻衣 (北海道大学大学院)

無生物主語構文についての研究は、これまで主に日本語と比較する形で行われてきたが、実際に用いられているのはどのようなタイプの無生物主語構文なのか、どのような状況で使用されているのか、ということに関してはあまり研究が進んでいない。本発表はこのような現状を踏まえ、以下のような分析を試みた。文脈に関連させた観察などを行い、無生物主語構文に関する新たな知見を得ることを目的としている。

- (1) 実際に使用されている無生物主語構文に特徴があるか調べるために、現代アメリカ映画と小説から文例を収集した。使用頻度の高い動詞や、主語のタイプによる3種類の分類などを提示する。
- (2) 会話において特徴的な、疑問詞が主語になっているもの(例：“What makes you think…?”)について(1)のデータを用いて文脈を観察する。このタイプの発話は、基本的に「意外性」が感じられる発言や行動に対して用いられることを示す。

〈語学部門：招聘発表〉

日本語の知覚体験による事態把握における表現の特徴について
—言語表現と映画ポスターの関連にもふれて—

尾野 治彦（北海道武蔵女子短期大学）

Iモード（体験的把握）、Dモード（分析的把握）の講文的な対立については、すでに中村によって、23項目に渡って詳細に論じられているが、本発表では、体験的な事態把握における語彙レベルでの表現の特徴について、英語の対応表現との比較から論じる。特に、体験的把握における認識においては、知覚作用と密接な関わりを持つことから、「見える」や「顔」といった視覚作用が関わっている表現が多く用いられることを指摘する。また、視覚体験による認識は、視覚作用に留まらず、様々な感覚体験的な表現や「続く」のようなプロセス体験的な語の多用につながることを示す。また、感覚体験的な表現は、英語の分析的な表現に比べ、多弁になりがちであるが、それはなぜかについても考察する。

事態把握による違いは、言語表現以外の様々な文化的な現象に及んでいるが、本発表ではその一つの表れとして日米の映画ポスターを取り上げ、その違いについても考えてみたい。

〈語学部門：セミナー〉

生物言語学としての第二言語獲得研究と英語教育

遊佐 典昭（宮城学院女子大学）

生成文法に基づいた第二言語獲得研究を「普遍文法に基づく第二言語獲得研究」、あるいは、最近のことばを使えば「生物言語学としての第二言語獲得研究」と呼びます。生成文法はその当初から生物言語学のアプローチを採用してきましたが、最近その傾向が顕著になっています。しかし、第二言語獲得研究も生物言語学の一部であるにもかかわらず、理論言語学者の関心外にあるように思われます。一方、第二言語獲得研究者は、生成文法や生物言語学に関心を示してこなかったように思えます。このような現状を考慮して、本セミナーは、生成生物言語学に基づいた第二言語獲得研究を、言語知識、言語処理などの観点から考察したいと思います。また、時間が許せば、基礎研究としての第二言語獲得研究と、教育工学としての英語教育の関係にも言及する予定です。

〈語学部門：特別講演〉

日英語の語彙概念拡張に関する一考察

岡田 禎之（大阪大学）

本発表では、Waltereit (1999) などで扱われているメトニミー的な語彙概念拡張が、主に目的語位置において生産的に生じるという観察に対して、英語（及び日本語）のいくつかの名詞表現の

拡張のあり方を調査・検証することを通じて、その妥当性を検討し、修正を加えたいと考える。BNCおよび現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)を利用して、項位置における拡張解釈と付加詞位置における拡張解釈の間には、基本的に非対称な分布が認められることを確認し、またOEDを利用した歴史的事例の初期的な観察から、やはり項位置における拡張事例からの概念拡張解釈の浸透が生産的に認められることを確認していく。このような観察から導き出せる一般化として、「付加詞位置のみに認められる語彙概念拡張は著しく生産性の低いものである」ことが判明し、また概念拡張という視点から見た場合、メトニミーとメタファーを殊更に区別だてする必要はないのではないかと考えられる。